

[研究ノート]

戦後台湾の道德教育

—戦後の生徒へのインタビューを通して—

Moral Education of Taiwan after World War II

張汝秀・山田美香

Chang Ju-hsiu・Mika Yamada

はじめに

1. 道德教育とは何か—日本を中心とした議論
 - 1.1 1950年代道德教育の始まり
 - 1.2 1958年「特設道德」
 - 1.3 道德教育は政治的である
 - 1.4 道德教育に関わる問題意識
2. インタビューについて
3. 法師 A さん
 - 3.1 自分が受けた道德教育
 - 3.2 愛国心教育
 - 3.3 年代による家庭教育の違い
 - 3.4 まとめ
4. 法師 B さん
 - 4.1 小、中学校で受けた道德教育
 - 4.2 道德教育と宗教
 - 4.3 家庭教育と宗教教育
 - 4.4 まとめ
5. 大学教員 C さん
 - 5.1 自分が受けた道德教育
 - 5.2 大陸との関係
 - 5.3 教科書
 - 5.4 日本のサブカルチャー
 - 5.5 国旗
 - 5.6 親の道德教育
 - 5.7 まとめ
6. 会社員 D さん
 - 6.1 自分が受けた道德教育
 - 6.2 道德教育の授業
 - 6.3 国家
 - 6.4 家庭の教育
 - 6.5 まとめ

おわりに

要旨

本研究は、1970-80年代に生徒であった者に道德教育についてインタビューをしたことをまとめたものである。当時の道德教育と愛国心教育を中心にインタビューをしたが、道德教育に覚えているのは基本的な生活に関わる指導で、愛国心教育については現在までその影響を受けている者はほとんどいなかった。戦後台湾の道德教育は制度として愛国心教育を重視したが、生徒に与える影響は本人の考え方にもよって異なることが明らかとなった。

キーワード：戦後台湾、道德教育、愛国心、元生徒

はじめに

本研究は戦後台湾の道德教育と愛国心に関する研究であり、特に1970-80年代に生徒であった者に対するインタビューを中心に整理したものである。これまで本研究について、戦後台湾の小学・高校の道德教育の教科書の変化を中心に、その時代背景との関連で研究してきた¹。

一方で戦後日本では、戦前の修身科が廃止されたのち1958年「特設道德」として、学校教育で道德教育が開始された。教師のなかで「特設道德」に対する理解は大きく異なった。よく言われるのは、「特設道德」以降も意図的に道德教育を行わない教師が多くいたということである。教育の在り方が戦前・戦後と大きく異なり、戦時中の教育を受けた教師、戦後教育のみを受けた教師、どちらも道德教育には批判的な者が多かった。

本研究では、生徒の視点で台湾の道德教育がどのような意味を持つのかについてまとめた。日本は1958年「特設道德」から2018年「特別の教科道德」となるまで、道德教育に関わる議論がほとんどなかった。しかし台湾では時代背景から道德教育が重視され、絶えず道德教育は議論すべき対象とみなされた。戦後台湾の学習指導要領・教科書は時代とともに改訂されてきた。

台湾の道德教育の先行研究は大変多いが、過去に道德教育を受けた者に対してインタビューを行った研究はほとんどない。修士・博士論文、雑誌論文など先行研究の多くは、例えば社会科と道德科が同一の教科として教えられた「公民と道德」のカリキュラム研究によってその政治性を論じるものが中心である。しかしそれはカリキュラム研究であり、愛国心教育の研究とは言えないものであった。

日本では山崎直也が、科研若手研究(B)「台湾の小・中・高校教科書とナショナル・アイデンティティに関する包括的研究」(研究課題/領域番号20730534、2008-2010)に関連する研究を研究し、単著『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』(2009)を出版した。山崎は、阿古智子・

¹山田美香「研究ノート 戦後台湾の道德教育と愛国心 -教師へのインタビュー-」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』(31) 2019年1月。Mika Yamada, 'The moral education in post-war Asia (Japan, China, and Taiwan)', ASSOCIATION FOR MORAL EDUCATION 44th Annual AME Conference 2018 Barcelona 2018年11月9日、ポスター研究。山田美香「研究ノート 戦後台湾における高校の道德教育」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』(30) 129-149、2018年7月。山田美香「研究ノート 戦後台湾国民小学の道德教育」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』(29) 167-190、2018年1月。山田美香「香港の愛国心教育の歴史」教育史学会第61回大会(於：岡山大学) 2017年10月8日口頭研究。

大澤肇・王雪萍編『変容する中華世界の教育とアイデンティティ』（国際書院、2017年）においても執筆している。しかし山崎の研究は、主に中学教育の政治的な背景を中心としたものである。

本研究は道德教育における愛国心教育の研究であるが、戦後台湾の道德教育を「愛国心教育」として議論する者は少なく、大変思想性が高い「政治教育」と論じる者が多い。その「政治教育」が愛国心教育と言えないのは、国際社会における台湾の外交上の立ち位置によるものである。

最近の研究で言えば、曾露瑤「高中教科書國家認同的内容分析：臺灣民主化後與香港政權轉移後的比較」（碩士論文－國立臺灣大學國家發展研究所 2014）が香港との比較で高校教科書の内容分析を論じている。伊藤健は「臺灣與日本小學道德課程與教學之個案研究」（碩士論文－國立臺灣師範大學課程與教學研究所 2014）で、日本と台湾の小学の道德教育を研究している。

台湾の道德教育を論じるうえで他の国・地域と比較した方が、台湾の実情をより明確にできるのであろう。実質的に何が愛国心教育であったのか、生徒がその教育を受け止め現在どのように思っているのかは、台湾人でも人によって思いは全く違うことから研究としてまとめることは難しい。そのため愛国心教育を受けたことによる影響ではなく、当時の愛国心教育のカリキュラム研究が多いのは仕方がないと言える。

以上のことから本研究においては、調査対象者が自ら受けた道德教育をどのように捉え、また台湾で最も敏感な「愛国心教育」をどのように理解したのかを明らかにする。

1. 道德教育とは何か－日本を中心とした議論

1.1 1950年代道德教育の始まり

戦後占領期の日本において、社会科によって子どもが道德的価値を学んだ。占領期ゆえにアメリカからの社会科教育が入ってきたことで、これまでのような修身科の内容・方法論とは全くの別物を学んだのである。

1967年から文部省生徒指導資料作成委員であった坂本昇一（1974）は、占領期の社会科道德教育ではなく、生活指導による道德教育が1951年以降行われようとしたが、占領期の徹底した戦前の教育の排除から独立後はそのような圧力がなくなり、道德の時間で行うべきか、全教育活動で道德教育を行うべきかの論争があったという²。現在、学習指導要領が改訂され「特別の教科道德」となり小学校では教科としての道德教育が行われているが、全教育活動で道德教育が行われている。しかしながら占領後の流れは、坂本が言うような社会科道德教育、生活のなかで生徒に必要な道德的指導を行う生活指導ではなく、1958年「特設道德」で道德的価値を学ぶ時間を持つことになった。

1958年「道德の時間」が始まるまでについて、坂本は次のように述べている。

²浜田陽太郎編『[討論]戦後教育の潮流 改革の理念は生きつづけたか』日本放送出版協会、昭和49年、p.98。

生活指導はある特定の活動をやるものというような領域的な捉え方ではなくて、機能として捉えられるものです。その機能としての生活指導で道德教育もやっているわけですが、現実に生活指導が機能として作用する道德教育は何をやっているのかということを検討してみますと、全人的とかなんとかいいますが、ほとんど具体的には、はっきりやっていないような実態が多かった。やっている教師のほうでもはっきり意図的なものをもっていなかっただろうし、またたとえば計画の段階をみましても、生活指導として計画しますので、道德的資質だけを高めるといふ計画にはならないわけです³。

道德教育が全面道德的な形で行われた26年以降33年までは、生徒指導も（そのころは生活指導とっていましたが）とても活発なんです。それが33年にかぎ道德、特設道德が出てきますと、生徒指導としての道德教育の補充、深化、統合だという位置づけだとしたら、生徒指導も十分にやった上で道德もやるのだという形に具体的にはなるわけなんです。それが、生徒指導は意気消沈してしまい、道德教育だけが実践の中心にでてくる⁴。

それまで生活指導で生徒を指導してきたことは道德教育でもあったが、その生活指導は目標・カリキュラムが重視されたものではなく、生徒に必要な指導を行ったものである。しかし生活指導と道德教育は全く同じものとは言えないため、1958年「特設道德」以前は道德教育の必要・不必要を盛んに議論する雰囲気があった。

1.2 1958年「特設道德」

1958年「特設道德」が成立して以降、学校教育全体で道德教育を行うことが指導された。教師は道德教育の教授法を知らず授業を行うことができないため、道德教育がどうあるべきかという研究ではなく、教授法のみ研究対象とした。学校教育において「道德教育」という概念がない時代であったため、授業研究が盛んになった。

「特設道德」が行われることで道德教育はカリキュラムが重視され、多くの教師はカリキュラムをもとに目標達成ができる実践の方法論を求めようになった。道德教育とは何か、その根本的なところを求めるとはではなく、実践報告を行う教師が大幅に増えた。実践報告の方が歓迎されたのは、当時行われた「特設道德」への対応に多くの教師が戸惑っていたためである。現在でも多くの教師が道德教育の実践にのみ関心があり、文科省教科調査官が主張する実践に流されている。

1958年「特設道德」が行われることによって、各地で教育委員会を中心に副読本などを作成した。それまで道德教育がなかったことから資料もなく、何をもとに授業を行ったらいいのか、そこから議論が始まった。その結果行われたのは読み物資料で「特設道德」の授業を行うことであった。文科省の教科調査官によって読み物資料の読み解き方、それに関わる授業の実践方法、どの読み物

³同上、p.99。

⁴同上、p.101。

資料がどの学年に配当されるのかがすべて固められた。そのため、今なお道徳教育で読み物資料が必要である理由は考えられることはなく、「特別の教科」となっても読み物資料による授業が幅を利かせている。

「特設道徳」が必要とされたのは、それまでの生活指導・生徒指導では生徒に道徳的価値が教えられていないと理解されたためである。そのため「特設道徳」の授業では、子どもが徐々に道徳価値を学んでいくものではなく、あるべき道徳的価値を教えることに重点が置かれた。これが大きな問題であるのは、坂本昇一（1974）が「組織化されるために本質的な柔軟性というもの、これを特別活動や道徳が見失って形骸化したら、たいへんなことになるという感じはもっています」⁵と語っている通りである。

現在も、生徒が自分の問題を解決することに必要な道徳的価値ではなく、学校が生徒の状況とは関係がない道徳的価値を教える傾向は変わっていない。これが日本における道徳教育の大きな問題である。

1.3 道徳教育は政治的である

1958年「特設道徳」は現場の声から始まったものではないため、現場の生活指導・生徒指導の感覚と歯車が合わなかった。2018年度に始まった「特別の教科道徳」も、小学校の現場ではどのように授業を組み立てたらいいのかに関心があり、何のために授業を行うのかが考えられていない。

2018年度小学校で道徳教育は「教科化」されたが、1958年「特設」前の保守派の道徳に関わる動きとそれに反発する日教組との構図以外、道徳教育の議論は歴史的に見るべきものがほとんどない状況である。現在、「特別の教科」となっても、現場で必要な「特別な教科」の教育がどのような視点で行われたらいいのかを考える者がほとんどいない。教科書・読み物資料の扱いの議論に終始し、政治的な問題、道徳教育の意義・特別の教科化への動きに対する問題意識は薄れている。

1.4 道徳教育に関わる問題意識

このような道徳教育に対する問題意識の低さをどのように理解したらよいのであろうか。そこで本研究では、戦後台湾において、生徒からみて道徳教育とは何であったのかを論じたい。2000年から台湾の小中学では道徳教育に関わる教科（領域）がなくなり、学校教育活動のあらゆる場面で道徳教育が行われている。台湾では「道徳」という冠教科がなくなりあらゆる場面で道徳教育を行うというのは、これまでの「道徳教育」が思想教育に偏りすぎたためである。

一方、日本では「特設道徳」が「特別の教科」化したのが、「特設道徳」と「特別の教科」との間の教育的内容に大きな違いはない。「特別の教科」となっても実質的にほとんど授業内容に変化はないが、政治的な意向として道徳教育の地位を高める必要があったのである。

⁵同上、p.104。

それでは、日本において生徒に道徳的価値を教えるために「教科化」する意義はどこにあるのだろうか。2018年「特別の教科」道徳教育が「特設道徳」との違いも明確でないまま始まったことに対して、どのように考えたらよいのであろうか。

本報告では、戦後日本の道徳教育の歴史と「特別の教科化」を考えるうえで、台湾で道徳教育が教科であった時期に教育を受けた対象者に思うところを述べてもらった。日本の「特別の教科」化が、誰にとってプラスになるものであるのかを考える契機としたい。

2. インタビューについて

本研究では、2018年7月、法師2人、会社員1人、大学教員1人の4人にインタビューをした。法師2人は違う日程で同じ寺でインタビューを行った。会社員、大学教員は高雄にある大学でインタビューをした。本調査は、名古屋市立大学大学院研究倫理審査委員会で研究倫理の申請をして認可された（ID番号17026）。同時に4人のインタビュー対象者には、本報告の原稿を送り今回報告することについて同意を得ている。インタビューは各1-2時間行った。

- ・法師Aさん（女性） 1959年生まれ
- ・法師Bさん（男性） 1975年生まれ
- ・大学教員Cさん（男性）1969年生まれ
- ・会社員Dさん（女性） 1982年生まれ

これらの対象者を選出したのは、1950年代から1980年代の戒厳令解除までに生まれた者に話を聞きたかったことによる。また、法師Aさん・Bさんは宗教の世界に生きる者であり宗教と道徳教育について率直なところを述べてほしいと考えた。台湾の道徳教育では宗教教育が行われていないが、学校で自ら愛国心教育を受けた法師2人に話を聞くことで、宗教から見た愛国心の捉え方について理解したいためである。

大学教員Cさん・会社員Dさんは、ともに専門的に日本語を学び、客観的に台湾をよく理解している者である。愛国心・道徳教育について自らの視点で話をしてほしいと考え、今回対象者として選出した。

インタビューの内容は本稿で紹介していくが、そのなかで分かりづらいところは（ ）で筆者が説明をつけた。

今回の調査については、事前に調査対象者に質問項目を送っている。

- ・自分が受けた道徳教育で覚えていること
- ・先生がどのように道徳教育を教えていたか？

- ・先生はどんなことを中心に話をしていたのか？
- ・先生と子どもは道德教育に対してどんな意識を持っていたのか？
- ・子どもの時の道德教育のイメージは？
- ・道德教育で、愛国心教育はどのように教えられていたか？
- ・国家に対してどんな気持ちを持っていたか？
- ・教科書は何を使っていたか？
- ・親が道德教育についてどのような意識を持っていたか？
- ・親は、道德教育のどんな価値観を重視していたのか？
- ・親が言う道德をどのように思ったのか？

インタビューでは、自分が受けた道德教育を中心に愛国心がどのように教えられたのか分かる範囲で話をしてもらった。

3. 法師 A さん

A さんは 1959 年生まれ、小学卒業 1971 年、中学卒業 1974 年、高校卒業 1977 年、1994 年に出家し、同年、寺の仏学院（大学、大学院の設立あり）に入学した。2004 年に日本の大学院歴史研究科に入学後、2007 年博士号を取得した。出家歴は 25 年で、インタビューの際は 60 歳であった。

3.1 自分が受けた道德教育

A さんが小学校・中学校・高校で受けた道德教育は中国の伝統的な倫理観、いわゆる四維八徳というものであった。特に、「礼義廉恥（れいぎれんち）」の四維、日常生活のなかで、例えば人と人の付き合いにはかなり重要であったという。また、四維八徳の意味合いは確かに深いものであるが、学校における教え方は子どもの身近なものから教えていく。子どもは成長とともにその意味を身に付けるので、道德教育によるその影響力と重要性が大きいと話した。

もちろん深い態度として示すことはできないけれど、イメージのなかに、これはダメ、あれはダメというのはあります。そして将来もっと大きくなると、その考え方により影響が大きくなります。

一略一。子どもの時は人格の形成に大切な時期ですね。たとえば両親が立派な人格で心が綺麗な人なら、将来、その子どもさん、社会に出たらますます人間関係がよくなります。

日本の学校でも四維八徳の内容を教えるが、日本人はよく教師の教えを忘れるという質問に対し、A さんは以下のように述べた。

私の考えでは、国は違うけれど、意味は同じです。私には日本人の友達があります。友だちとの付き合いのなかで日本人の友達にはこの道德価値があるので、日本人はこれらの道德価値を持ってないわけじゃない、と思いますよ。日本人は台湾人よりちゃんとやっていますよ。たとえば、人との付き合いのなか、時間をちゃんと守ってくれるし、礼儀正しい。かえって台湾人はだんだん道德的価値を持たなくなってきました。西洋からの影響で、だから、だんだんなくなりました。

Aさんは道德科目に関して覚えていたのは、小学校「生活と倫理」と高校「三民主義」だけであった。「生活と倫理」の内容について、例えば、目上の人への尊重という教えがあり、目上の人が先に食べて自分が食べるということを教えられた。今はお菓子や果物をいただいたら、まずお釈迦様にお供養をしてから自分が食べる。また、小中学校の先生の教え方は教科書のままではなく、いろいろな例を挙げて説明をして、できるだけ教科書の内容と普段の生活を繋げて生徒により理解させようとした。

3.2 愛国心教育

Aさんによれば、小学校の道德教育で教わった愛国心教育、例えば孫文または蒋介石の内容は押し付けられたものなのでほとんど忘れてしまい、二人とも軍人というイメージしか残っていないという。

ほとんど忘れました。国歌、孫文とか。教科書のなかではよく強調されていたので、強制的に頭の中に入れました。孫文のイメージは、国のお父さん。子ども時代は、蒋介石のイメージが少し強く、孫文のことはあまり触れなかつ

たです。孫文の場合、一般的な思想のほかに、軍人としてのイメージが強いです。蒋介石の場合、軍人のイメージが強いです。政策とかも。孫文とは全く違うイメージです。

現在、台湾の愛国心教育は以前と比べて少なくなった。日本では今年度から「特別の教科 道德」として「国を愛する態度」を教育している。小学2年生の「道德」で国旗、「音楽」で君が代を学ぶことに対し、Aさんは次のように言った。

勉強していることは、いいことです。以前、高校生の時重要な集会があったら、はじめに必ず国歌を歌っていました。今はそれがありません。台湾の若い人が国へのイメージが薄く、例えば、将来台湾と中国と戦争があれば、若い人は戦争はほしくないと思ひ、国のために一生懸命やる気持ちがたぶんないといえます。もちろん、これは教育の問題でもあります。親の家庭教育の問題でもあります、いろいろね。でも、将来変わるかもしれません、日本のように。

1987年戒厳令が解除されたが、Aさんは28歳くらいだった。「蒋介石は、もちろんこの地区の軍人だから、やっぱり強引でその傾向はありますね。蔣経国は厳しいことがない。自由主義。戒厳令解除されてからは」と述べるように、時代で大きく政治的背景が異なった。

でも、今の時代は厳しいということは聞いたことがないですね。楽ですよ。もちろん、40年前くらいはとても厳しかったです。毎日訓練とかいろいろやって、そしてこの訓練があれば、自分の人生、人格の形成にもつながりますね。

3.3 年代による家庭教育の違い

今の20代以下の若い人はともかく、多くの台湾人は保護者のしつけの厳しさを愚痴ることが多い。特に父親が厳しいのは、父親が兵役で殴られたことから家庭で子どもを殴るのかと聞いた。

違いますよ。それ、関係ないですよ。その厳しすぎる時は、みんなの教育程度が低かったんです。子どもにどのように教えるのか、自分のイメージだけがありました。教育方法が分かりませんでした。ほとんど小学校しか出ていません。50年前は、勉強しない人が多かったです、戦後まもなくで。（殴ることを）教育の一つの方法として考えていました。

法師であるため信者から悩み事を聞いているが、信者の心が安定しない場合小さい時に両親から叩かれたことが影響しているようである。

もちろん。例えば、私、小さいとき間違えば叩かれました。ありますよ。以前は、子どもが多いです。今は子どもが1人、2人です。親からの愛情がいっぱいもらえる、というものです。

現在子どもは恵まれた家庭で育てているが、そのような子どもに対してどのような道徳教育が必要なのであろうか。Aさんは、「基本的に、五倫、つまり親子、夫婦、上下、兄弟、友達という五つの相互関係、理想的な在り方を教える必要があります。将来、物事を考えるとき、特に知識とか礼儀とか、心の優しさが足りないときは、きっと役立つかもしれません」と述べている。

3.4 まとめ

Aさんは台湾の伝統的な家庭で育てられ、35歳の時、出家した。学校で行われる道徳教育の重要性と影響力を強調し、道徳教育を行わない今の台湾社会で生じた愛国心の薄さ、礼儀の悪さなどに批判的視点を示した。彼女は日本で3年間の留学生生活を体験したことから、日本人の礼儀、時間を守るなどを評価し、日本の道徳教育、愛国心教育にかなり賛成している。また、子どもに必要なとさ

れる親子・夫婦・上下・兄弟・友人という五倫の理想的な在り方をきちんと教えるべきだと考えていた。

Aさんはどちらかといえば古い道徳的価値観を大事にし、愛国心の重要性を述べている。それは単に愛国心が重要なのではなく、現在の台湾の政治的立場を考えると愛国心教育があった方がいいという意見に思った。

4. 法師 B さん

法師 B さんは 1975 年生まれで、1990 年に中学卒業、1995 年に五専部（高専）電子機械学科卒業、1997 年に兵役を終え、1998 年に出家した。21 年の出家歴で、現在 45 歳である（2018 年 7 月段階）。今回訪ねた寺の僧侶であり、また他の寺の住職も務めている。

4.1 小、中学校で受けた道徳教育

B さんによれば、道徳教育と言えば、小学校は蒋介石の新生活運動（国民の生活を規律化、軍事化するため生活様式と社会倫理の改進黨運動）、中学校は孔子の『論語』についてのイメージが残っているという。また『論語』というのは完全な暗記もので、面白さは全然感じなかった。特に中学校の進学競争のもと学校で勉強しなければならないため、面白いどころか、やむ得ない気持ちのほうが強かったという。

先生の教えは、ほとんど家族のを中心にするものでした。親孝行とか親子の関係とか、とにかく家庭の教育をすごく重視していました。例えばいろいろな物語から親孝行とかを教わったりするのです。もちろん、国への愛国心も教わりました。中学校の「公民と道徳」の授業は仕事や日常生活の人間関係など、よい国民の形成としての社会面の教えを重視していました。今考えると、教科書が道徳教育に関係していたのは、やはり国語科です。国語のなかで、詩とか物語とかそのなかから道徳に関連するものが多く入っていました。

学校の道徳教育が人生に影響を与えたのかという質問に対しては、「ありますね。道徳教育の影響というのは、優しくなったり、判断力を持つことができます。いいことと悪いことの判断ができます」と述べた。それは学校の教師が厳しいため生徒が善悪を理解できるようになったのではなく、生徒が自分で重要だと思ったためである。「子どもは何も知らないから、学校の先生が授業で子どもに話す内容ってすごく強い影響があって、悪いことをしてはいけないし、この時はこういう判断をしよう、判断力ができていく」と思ったようである。

当時台湾の道徳教育は学校の授業を通じて行ったが、B さんは、家庭教育こそ重要な役割を果たしたと言っている。

子どもの頃、親はみなすごく厳しいです。先生の方がやさしいです。(基本的に) 厳しく教育してくれました。で、今の教育方針は、やっぱり、優しい先生の方がいい(愛の教育)ですね。――略――。

Bさん本人は、子ども時代、先生が厳しい方がいいという意見を持っていた。

4.2 道徳教育と宗教

Bさんは中学からベジタリアンで、1995年、第一志望の有名な理工系学校(五年制)に入った。1998年(24歳)に出家し、寺の建築に携わる仕事などを経て、現在は法事で忙しい。45歳(インタビュー時点)であるが、他のお寺の住職を既に務めている。一方、儒教の教えと仏教の教義はだいぶ異なりその追究しているものも全く違うので、学校で受けた道徳的なものと後で出家したことは全然関係ないと語った。

出家と道徳教育はあまり関係ないような気がします。出家は、普段の生活と違って別の生活。死ぬと生きることを解釈するために出家を選んだんです。

また、1980年代の台湾は依然として愛国心教育が強かったが、1975年生まれの本さんは「確かに、この年代は強かったです。それに兵役にも服さなければなりません。この二年間、自分は国に貢献しました。それは義務付けられてるので」と話した。子どものころに出家しても、その年になったら兵役に行かなければならないし、兵役中かなり厳しいので、「叱られたり、殴られたりすることがあって、様々な訓練とか、とにかくいろいろあります。でも、それによって辛抱強い男になり、成長しました」と語った。

国を愛するという気持ちを聞いたら、「昔はあったけれど、今はもうそう思いません。自分のことを大事にしなきゃ。国というよりも、人間を大事にしなきゃならないと思います。みんな平等ですから」と話した。「仏教、仏様の道に行くと、世界平和は大事だけれど国家というのはいらないですよ、今は」というのがBさんの考えであった。

4.3 家庭教育と宗教教育

子どもの頃、親から教わった道徳的な価値について、「一番大事なのは、学校の成績と近所に迷惑をかけないことです。その他に、例えば、悪い友達と一緒にならないこと、夜遅く帰らないこと、出かけるときは必ず親に知らせることなどです。また、親は自分を手本として子どもに見せませう」と言っていて、学校の成績が悪いと、「親はいつも先に原因を聞いて、勉強していないのか、それとも先生の授業が分からないのか、もし自分が遊びすぎて成績が悪かったら叩かれます。授業で先生の教えが分からない場合は、塾でもう一度習わせます」と語った。

Bさんはこのように親から厳しくしつけられたことで、寺での修行にもついていけた。寺の修業

は厳しく、「一般的な親は、お寺で修行するのはやっぱり大変だから、反対ですね」と言う。寺の修業は次のようなものである。

四時半にお経、五時休み、六時朝食、八時からそれぞれの仕事、十一時休みと食事、二時から五時までそれぞれの仕事、五時から食事。食事はしなくてもいい。七時半から八時半までお経、九時から休み、就寝。

法師の仕事として、日本だと学校に道德教育または“生死”と関係している生命教育などの授業に行く。台湾では刑務所で受刑者を更生させることが多いようである。それは、小・中・高に行って授業するのは宗教的な中立性の問題で難しいが（大学なら可）、その代わり、小・中学生向けの夏キャンプはよく行っている。現在、袱紗（1000円）を納めるだけで5日間のキャンプはすべて無料で、どんな宗教の子どもでもこのお寺のキャンプに参加できる。毎回、だいたい500名がキャンプに来るようである。

宗教教育についてBさんは、「中学以降はあった方がいい。小学の場合は儒教を学んだ方がいい。中学以降は生徒に判断力があるから、自分に合っている宗教を選べる」と述べた。

4.4 まとめ

Bさんは、学校における道德教育は生徒にかなりの影響を与えるが、家庭教育はより大きな役割を果たしていると考えている。また、現在学校で行っている「愛の教育」よりも、以前のように子どもに厳しく要求した方が効果的だという。また、小学生に儒教の価値観を教え、中学以降の宗教教育の導入によって判断力がある生徒に自分に合った教えを選ばせればいいと話す。Bさんによれば、学校における道德教育は生活に必要なことを学んだのみで、特に自分の考えに影響を与えるものではなかった。そうであれば学校で受ける道德教育は、宗教ほど意味を持たないものであったのだろうか。

学校における道德教育は国・社会・家庭などに関わることを学ぶのであるが、学校における道德教育ゆえに政治教育が強化されているのは問題である。学校における道德教育には、自分が大事に思うもの、例えば宗教を信仰することなどの学びはない。Bさんからすれば、学校における道德教育の学びは、人として生きていくうえでは不十分なものだと思えたのである。

5. 大学教員 C さん

大学教員Cさんは1969年生まれで、インタビューの際の年齢は48歳である。1987年に大学の日本語学科に入学し、その後日本に5-6年留学し、現在台湾の大学教員である。日本での生活が長いので、台湾の教育について客観的に話をした。

5.1 自分が受けた道德教育

Cさんに事前にどんな質問をするのかを伝えていたので、一通り道德教育について思い返したり調べたようで、その記憶は大変細かいものであった。

小、中、いや高校までは、道德教育の授業があったんですけども、正直に言えば、はっきりとは覚えてないんですけども、振り返ってみると、ですね、先生は大体、教科書通りにやっていました。だいたい、5つの部分に分けてですね、たぶん、自分自身に関することとか、たとえば善悪の判断とか、自立、責任、それから向上心などで、それから人とのかかわりに関することは、親切や思いやり、感謝の気持ち、礼儀正しい、それから相互理解、寛容な態度をとることなんですけれども、社会との関わりに関することは、例えば、規則の尊重や、家族愛、国を愛する態度などです。自然との関わりに関することは、命の尊さや、自然愛護、環境、それから畏敬の念などですが、そうですね、そのくらいですが。

1980年代に自分を知り価値観や規則を学び、家族や国を愛し、自然を大事にすることを中心に教えられたという。小学生から特定の考えを教えるのが道德教育ではなく、子どもが成長する過程に必要な教育をするのが道德教育であった。教科書もあったので、教科書通りの授業であったが、「時間によっては詳しく説明してくれたこともあったし、飛ばしたこともあった」とのことである。

Cさんは、道德教育に関わり、小学は「生活と倫理」、中学は「公民と道德」を受けていた。小学・中学の内容はあまり変わらないと述べたが、「中学に上がったら、社会性を養うことに重点を置いていた」とも記憶している。「小学レベルは、人と人との関係に重点を置いてたかなっ、と思ってますけれども、まあ、はっきり覚えてないんです」ということであった。

Cさんの教師は学校生活で最低限必要なルールを守ることに、「そう興味はなかったと思いますけれども、やっぱり学校のルールとかは、その時はたぶん学校の規則ですね、規則に従わなければならない理由を教えてたんですけども」と述べている。Cさんは集団生活のなかで守るべきことを教えられたが、教師に強制的に従わされるという意識はなかったらしい。

そのため教師が「静かにしなさい」と指示・指導すれば、「人によっては違ってたんですが、でも小学のときにはみんなやっぱり静かだったと…そんなに騒いでなかったんですが・・・」という状況であった。このCさんが行く学校は成績が良い子どもが通うところであった。「他の人に迷惑はかけないことを一番重要視されてきたんです」と、その学校ではほとんどいじめがない状況であった。

5.2 大陸との関係

中学では状況が変わり、「台湾と大陸との関係がそのときはあまりよくなかったので、何か怪しい人を見つけたら、また何か不審なピラを拾ったら、必ず先生、警察に通報に行かなければなら

い、ということを、私覚えてますが」と言う。

中国大陸・共産党と台湾との政治事情によって、中学でもそのような指導がなされたのである。ビラを拾った経験はないようだが、「一略一、何か不審な者に変な質問をされたらですね、答える必要がない、ということもあったんですけども」と、中学生でも中国大陸との関係は身近で、学校において共産党関係者に関わる情報を聞いたのである。

5.3 教科書

Cさんは1980年代半ば、教科書によって「公民と道徳」の授業を受けている。教科書はどのようなものを使っていたのだろうか。Cさんが言うには、三民主義と蒋介石の思想が記述された教科書であった。「蒋介石の生き方とかも中心に教えてくれたんですけども、三民主義も入試科目の一つだったんです」と、単に思想教育だといって三民主義を拒絶できなかったのは、「高校入試、大学入試」の科目であったためである。Cさんは一生懸命三民主義を勉強した。

「高校生の時はクイズみたいなものもあったんですけど、もし正確に答えたら、何かもらえるのもあったんですが」と、政府が中心となる活動のなかで蒋介石や三民主義の文言を絶えず聞くことになる。これによって中高生が本来あまり興味を持つ内容でないものの、蒋介石や三民主義に関心を持つようになった。

大学一年生の時も、そういう孫文に関する思想科目もあったんですね。その時は作文を書いたり、ポスターを作ったりといったコンクールもあったんですが、私もそのコンクール、1位で優勝していたんですよ。

1987年戒厳令解除の際は高校生となっており、教科書の変化を理解していた。「うん、徐々に変わりつつ。でも、今はなんか全然別世界」。「ちょっとだけ高校生になって、新しい思想、というか社会の、そうですね。ちょっとだけ。高校3年の時は天安門の事件もあったんですが、その時はいろんな影響を受けたんです」と説明した。政治そのものにはあまり興味はなかったようであるが、ものを考える年齢になり多様な情報も入ってきたことから社会の変化を理解するようになった。

高校時代、戒厳令解除を経て教師の在り方に何か変化があると感じたのであろうか。

そうですね。確かにそのときは例えば、日本時代のことは言うてはいけなかったんですけども、だんだん言えるようになってきたんですが、それから、大陸のことも、ですね、ちょっとだけ触れても大丈夫だったそうなんです。

戦後台湾の教科書は三民主義や蒋介石に関わる内容は多かったが、日本に関わることはほとんどなかった。教科書には日本の植民地主義に否定的な内容もそれほどなく、現代の日本に関わる情報もなかった。1987年に大学に入学して、日本の歴史に関する教科書を買うにしても申請が必

要であった。

大学に上がって、日本学科で、日本語を勉強してからですね、その時は日本の歴史というのをとっていたんですが、そのときの教科書は、ですね、他に申請してから台湾に入るんですね。

一略一。日本の歴史とかそのなかにはですね、大陸進出という表現が、侵略。

1982年日本の教科書問題がクローズアップされ、台湾では現在とは全く異なる情報抑制がなされており、日本語学科で日本語を勉強するのも現在と異なる背景があった。それは一言でいえば、日本植民地時代があり、そのうえで戦後台湾がどのように日本を意識したのかと関係がある。大学の日本語学科に入学することは、戦後史のなかで時代とともにその意味が異なった。日本語が学校教育とどのように関係があるのかは、下に示した通りである。

日本植民地時代—学校教育での教授言語

光復後—禁止される言語

1970年代—徐々に大学において日本語教育を行う。教育目的・教授法における試行錯誤

1980年代末—日本文化が輸入

1990年代—街中に日本文化が氾濫、大学における日本語学科・応用日本語学科などが林立、高校で第二外国語としての日本語教育が行われる。

現在—日本語に関心がある人が獲得した外国語としての日本語。学習環境は多様で整備されている⁶。

1980年代、徐々に日本文化が輸入され、当時高校生だったCさんも日本のサブカルチャーに親しむことになる。

5.4 日本のサブカルチャー

Cさんは高校時代に『明星』を愛読していた。値段は高いが本屋で買えるので定期購読をして楽しみにしていたという。日本語は分からなくても写真だけ見ていた。

他の影響は、「えーとですね、高校からよく日本のドラマを見てたんです。レンタル屋を通して。そのときは、日本の、ドラマをよく見てたんです」と、トレンドドラマに関心があったらしい。

以前、台湾の日本語教育関係者に、1970年代の台湾の日本語学科の情報を聞いたが、英語学科

⁶ 山田美香「台湾南部（高雄市）の日本語教育状況—英語教育との比較」文藻外語学院日文科講座 2012年10月26日13時10分—15時、於：文藻外語学院Z1308（台湾外交部台湾フェロシップ、研究期間：2012年7月—2012年10月）。

に入れない者が日本学科に入学した、あるいは、当時は中国大陸からきた日本語教師がおり日本語学科は政治的な学科であったと聞いている。

しかしながら80年代後半から90年代は、そのような状況になかったという。「クラスメイトは日本文化好きとか日本の生活に憧れている」人が多いというように、Cさんと同じように日本に関心を持った者が日本語学科を選んだ状況があった。「私も、えーと、英語学科を第一志望にしてたんですけども、でも私は文学がそれほど好きではなかったんです、だから日本語学科を選んだんです」と、大学の学科を選ぶときは自分の関心をもとに慎重になったようである。

大学でCさんは容易に日本文化を理解できたようである。

たぶん、高校時代から、日本のドラマを見てきて、あの、日本の文化はそんなに遠いところにあるものじゃなくて、身近なものだったんで、それから発音も台湾語に近いし、勉強しやすいという、イメージがあって。

日本が身近にあり大学の日本語学科で勉強をしたことから、その後は順調に日本語能力も身につけていく。

5.5 国旗

台湾は1990年代までは国民党一色であった。高校においては朝礼が朝7時半からあったという。

高校までは朝礼があって、ですね、みんな国旗とか国歌とかですね、そういうことをみんな大切にたんですけど、でも大学に上がったら、ですね、そういうことはめったになかったんですが、日本に行って、ですね、あの、もちろん台湾の国旗とか見たら、あっ！感動！うん、あまり見れないし、うん。特に国歌も耳入ったら、あ、なつかしい！そういうこともあったんですが、なつかしさ、かな。

ほとんどの台湾人は国歌が歌える。「そう、台湾の、大体私と同じ年の人、歌えると思います」と言うが、君が代についても、「確か古今和歌集の一部ですよ、君が代。あの、台湾ではですね、中は繰り返しの部分が多くて、ですね、覚えやすいですが」と、君が代が作成された背景も知っていた。

しかし、台湾では国歌を覚える場が少なくなっているらしい。

朝礼とか、入学式、卒業式、始業式、終業式。ですね、始まる前はみんな一緒に歌うのが定番になってます。でも、最近はですね、そういう風景がなくなっているような気がします。

Cさんが小さい時は国歌があちこちに流れていて、国歌は身近なものであった。

あ、確かに小さいときは映画館に行ってですね、映画が始まる前には、そういうこともあったんですが、あの、国歌が流れてから、始まる。ということだったんです。

国歌は C さんの心のどこかにあるのは事実である。小さい頃から学校教育でも生活のなかでも国歌がある国で育っている。学校時代はとにかく国歌を学び歌う状況であった。しかしさまざまな経験を経て、年を取ると国歌に思いを抱くようになった。海外に行くと国旗国歌から故郷を思い出すことは、C さんに限らず多くの人に共通することである。それは国旗国歌に対して思うところがあるというよりは、小さい頃から自分が国旗国歌を学んだ環境、家や学校や社会を思い出すからであろう。

5.6 親の道徳教育

それでは、C さんは家庭においてどのような教育を受けたのだろうか。

「うーんそうですねえ、やっぱり 1 番のポイントは、自分にしてほしくないことは他の人にしてはいけない、ということなんです」と、他人との関係を重視されたい。「つまり、迷惑をかけちゃだめ。それはエゴイストにはならないこと」であった。台湾では人間関係が重要だとされる社会であり、自分が目立つことにもあまり積極的ではない。それに C さんの家庭は仏教徒である宗教的な理由が加わり、「うーん、たぶん両親も仏教徒なんで、家族みんなそういうことをしてきた、かな。私は大家族だったんですが」と述べている。

それから、いつも感謝の気持ちを持つことも大切なんですね。あ、それから、モノを大切に。食べるものを粗末にしないこともよく言われていますが。

台湾社会では家族との関わりのなかで学ぶことが社会に出て役に立つようである。家庭が道徳教育に大きな影響を与えているのが分かる。

5.7 まとめ

C さんが受けてきた道徳教育はその当時の背景を踏まえた国家との関わりが強いものであり、家庭ではごく一般的なしつけを受けていた。C さんは前向きにこつこつと勉強することが好きであり、学校や家庭で要求されることを自ら身につけることで、自分なりに「国」を体で受け止めてきた。C さんは学校で自分がどうすべきなのかを学び、しかし台湾人として必要なものも身につけてきた。

そうはいつても、C さんが教育を受けた時代は 1980 年代で、自分の楽しみを持つことができる時代でもあった。例えば知識重視の教育や政治教育、さらに家庭内で人間関係が鍛えられるという環境があったとしても、日本のサブカルチャーに没頭したことが現在の C さんにつながったのである。1980 年代以前の政治教育や入試中心の勉強のみの世代ではなく、現在のように子ども中心

の教育や高校全入が目指されているのともCさんの時代は異なった。Cさんが1980年代に受けた教育は、それ以前・以後に受ける教育の狭間にあり、台湾の戦後と現在の台湾を結ぶ教育を受けた世代だと思われる。

6. 会社員Dさん

Dさんは1982年生まれで、小学卒業1994年、中学卒業97年、高校卒業2000年、二専卒業2002年、大学は2004年に入学して2007年に卒業した。36歳である(2018年7月)。専門高校でビジネス、大学は日本語学科で学んだ。現在は会社員である。

6.1 自分が受けた道徳教育

Dさんが受けた道徳教育は、小学は「生活と倫理」、中学は「公民と道徳」という科目であった。「近所の子とお互い手伝って、クラスメイトと仲良くして」と、教師が繰り返し言葉にしたことはよく覚えていた。ほかに、「ルールを守ること、家族を大事にすること」が頭に残っているという。

本研究の調査のためにこれまでの教科書を調べてくれたようだが、「中学校の時高校試験、入学試験のためにその科目は重視しないと。入試科目じゃなかった」と道徳教育が受験科目ではなかったことから一生懸命勉強する気にはなれなかったという。Cさんの場合は受験科目であったため将来に向かって一生懸命勉強したが、Dさんからすると受験科目ではなかったので関心を持たなかった。

授業以外でも教師は毎日の生活で生徒たちに必要なことを伝えた。教師はよく生徒に怒り、問題がある場合は輔導の先生と話をしたという。台湾には輔導の教師がおり、輔導室で生徒を指導支援する。「喧嘩とか、煙草を吸う」などをすると、輔導の先生の指導を受けるのである。

高校で他に指導する立場の者に軍隊から派遣された「教官」がいるが、その軍人は生徒指導にどのように関わったのであろうか。Dさんには憧れの「教官」がいたという。

実は、中学校の時卒業したら中華民国国軍に入りたいけど、お父さんは職業高校の方で勉強させたい。で、また勉強する科目、学科も自分の好きな学科じゃないから落ち込んで、教官に一言言われて、それですごく感激して、それで自分は将来教官のようにになりたいな、そういう印象があつて。教官が言ったことは、楽しむ1日、苦しむ1日があるとすれば、なぜ楽しい1日を選ばないのか、そういうことですね。

Dさんは教官が進学についてアドバイスをしたから軍隊に関心を持ったのである。軍人に興味を持ったのではなく、学校でアドバイスをしてくれた「教官」に感激したのである。

高校や大学などに軍人がいるのは台湾独自のものであるが、「教官」は生徒の道徳的指導・日常生活の指導に大きな影響を与えている。この「教官」は「全国防衛」という軍事に関わる授業と実

習を行うが、それ以外の時間は生徒に直接関わり生徒の相談も受ける。「教官」が学校にいること、その「教官」からアドバイスを受けることもごく普通のことである。

6.2 道德教育の授業

Dさんは中学の「公民と道德」についてあまり覚えていないようであったが、授業は教科書が中心で、「うーん、教科書を読んで、(先生が)試験の問題を作って、そんな感じ」と言う。道德教育といっても「公民と道德」は社会科科目でもあるので試験対策をする必要があった。普通科高校では「三民主義」の授業があるのだが、Dさんは専門高校に行ったので「三民主義」の授業を受けていない。学校教育のなかでは「公民と道德」以外のあらゆる科目において、教師が孫文や蒋介石の話をするのがよくあったという。Dさんは蒋介石について、「魚は川、上りますね」と蒋介石の有名な一言をよく覚えていた。

教科書は、国立編訳館が1科目につき1冊の教科書を出版するという時代から、民間出版社が多様な教科書を出版することが許された時期であった。Dさんの場合、小学校の教科書は有償とはいえ、それまでとは違いカラフルで見やすい教科書が使用された。

6.3 国家

国旗国歌は「中学1年生の国文」で学んだというが、小学の時はダンスや合唱団などで忙しく国旗国歌の記憶がないようである。朝礼で国歌を斉唱することはあるが、ダンスに忙しく「朝礼です、でも全然参加しないから分からない」という。朝礼に参加しないことが許される環境もあった。

国家については、中学の時、「選挙、いい人、選んで」と言われたのが国家を考えるきっかけだという。選挙制度を学ぶことで自分が動くことが国を変えることになることを理解し、現在も投票するという。Dさんは新しい時代に教育を受けているので、ストレートに選挙の重要性を述べることができる世代だと思われた。

6.4 家庭の教育

Dさんの家庭は、母親が中心にしつけをしたという。「お母さんからの影響が一番大きい。私が子どもの時、成績が、、、遅く帰ることダメ。お年寄りの人を見て手伝って。ごみを見たとき拾って捨てる」と、ごく当たり前のことを学んだという。バスなどで年配の人には席を譲ることができない人がいるなかで、Dさんは席を譲るという。

しかし親は成績が悪いと、罰として「ハンガー」で叩くことが多かった。

お母さんの実家が山のほうなので、いっぱい準備している。1年分。つまり、その時代はやっぱり叩くんですね。で、その後はやっぱり子どもを叩くのは良くない、今はそう意識してやらない。小学校の先生はそれをしない。80年代ですから叩かれた。90年代の子どもはそれをされない。

1980年代と90年代では、学校でも家庭でも教育方法が大きく変わったのである。ハンガーで叩くことでDさんの勉強が進んだのかというと、「叩かれないように勉強した。一生懸命勉強しないとまた叩かれるから。勉強するしかない」と、仕方がなく勉強するようになった。現在の30代より上の世代にとって、学校で勉強できることが唯一社会的地位を向上できるものだという考えがあったためである。日本以上に厳しい競争があるなかで、成績を上げなければ将来がないと思われていた。

このようなしつけを受けて、現在どのような価値観を重視するのかというと、「違法なことをしない。たとえば、税金をちゃんと払う。お父さんが法律にけっこう詳しいので、税金のことはちゃんと払っていかないと、やっぱり追求されるから。そうしないと罰金がかかる、それだけね」と、さっぱりとしている。

台湾では宗教に関心がある人が多く、学校や家庭以外に宗教によって必要な道徳を身につける人も多い。Dさんは儒学の影響もあるが、「小さい頃、幼稚園からカトリック。多少影響もあります。悪いことはしない」と言う。

6.5 まとめ

Dさんにとって学校の道徳教育は倫理観、特に教師を尊重することについて影響を受けるものであったという。Dさんの家庭はしっかりしつけをする方であったため、学校では教師を尊重するという学校でしか学べない価値観を学んだ。Dさんは専門高校、専門系の大学に進学し、社会に出て役立つ専門的な勉強を続けてきた。社会に出て必要とされる技術を中心に学ぶなど、社会に出て生きてくために必要な学びをしてきた。また、Dさんは明るく楽しんで生活できる人であり、同時に家庭や宗教的な影響もあり自分が大事にすべき価値観を持っていた。

おわりに

戦後台湾では道徳教育が学校における中心的な教科という時期もあった。しかし生徒にとってはその教科が必要であれば勉強するというものであった。学校の道徳教育は将来生徒が持つ道徳的価値観につながることから、絶えず政策的な意図によって行われる。戦後台湾はまさにそのような意図で思想教育としての道徳教育を行った。しかし4人のインタビュー対象者のなかで、学校の道徳教育が人生にとって意味があるものだと理解している者はほとんどいなかった。

質問項目にある「先生の授業内容」については、ほとんど記憶にないという対象者が多かった。しかし教師や親が自分にどんな価値観を伝えたのかを覚えている対象者は多かった。また、年配の対象者ほど、人との関係性における道徳を重視し、年齢が低い対象者は、学校における道徳に関心がなかったと率直に述べている。ここから分かるのは最低限必要な道徳的価値観は学校でなくても学べるが、学校はそれを何度も繰り返すこと、また時代とともに政権にとって必要な思想教育を行うことに役割があると言える。

台湾では教科としての道德教育はなくなり、そこから既に十数年が経っている。学校現場では日々の生活のなかで道德的に必要なことを教えている。つまり教科として必要なことを教えるのではなく、子どもにとって必要な指導をすることが道德教育となっている。

今後、台湾と日本の道德教育はどのような方向に向かっていくのだろうか。

台湾は日本と異なり、国際情勢のなかで台湾の「国」に関わる議論を多くする。それに関わる学校教育は、以前のような中国大陆との対立を明確に直接的に示すものではなく、国際社会における普遍的な価値観をもとに「国」の在り方を考えるものである。そのやり方は一定の年齢層からすると、「今の学校は、愛国心教育をしっかりとやっていない」というように見えるであろう。しかし中国大陆との関係で、学校において「国」に関わることを学ぶのは正直難しい。

日本は「特別の教科」、教科教育としての道德教育が徹底されることになると思う。実質今年度から「特別の教科」となったことから、今後教育実践を中心とした議論が高まっていくであろう。

「教科」というのは教科書によって授業を行い、成績を付ける必要がある。これまでの「特設道德」は教科書がなく成績を付ける必要もなかったため、今後その技術的な議論を持つことが多くなるだろう。道德教育関係者のなかでは、道德教育は必要なものであり、議論すべきは子どもにどのように道德を学ばせるかという考え方が強いからである。

本研究は基盤研究 (C) (一般) 課題番号 17K04564、研究代表者山田美香「東アジア儒教圏の道德教育と愛国心教育—日本の「特別の教科道德」を考えるために」(平成 29 年度～平成 33 年度) によるものである。本研究ノートは、台湾史研究会 (2019 年 3 月 24 日、於：関西大学) における「生徒から見た戦後台湾の道德教育」の研究原稿を加筆修正したものである。